2005年度

教育フォーラム　記録集

地域と学校の協働で
子どもたちの勤労観･職業観を育もう

開催日　2005年11月3日　10:00AM～15:30PM
会　場　埼玉県勤労者福祉センター（ときわ会館）

主催　連合埼玉／（社）埼玉県労働者福祉協議会

基調講演＜教育フォーラム２００５＞

競争と統制から共生と参加の場づくりへ

～学びと仕事の意味の再編成に向けて～

岩川　直樹（埼玉大学教育学部教授）

１．学びの分水嶺 2
A　個体還元 2
B　スキル主義 4
C　数量評価 5
D　達成目標 5
E　学力低下問題とは 7
２．仕事の教育の分水嶺 7
A　「キャリア教育」推進の背景 7
B　キャリア教育の現状 9
C　「仕事観」 9
D　分水嶺を見渡す 12
《質疑応答》 13

私は実は、今いろんなところで「なんとか力」と言われていることが大変気になっています。そんなところからお話したいと思います。教育の現在の状況に対して、どう認識しているのかをお話してから、後半できょうの主題〝である「仕事の教育」（世の中では「キャリア教育」と呼んでいますが）の問題についてお話しするという形を取りたいと思います。

１．学びの分水嶺

A　個体還元

◆「力」の位置付け

「なんとか力」という言葉はずいぶん増えていますね。電車で通勤していると吊り革広告には毎週新しい「なんとか力」と言う造語に出会っているように思います。文科省が出した義務教育改革のパンフレットを見ても「学校力」「教師力」のある教育体制の中で、子供たちの「人間力」を強化する、と言うような感じで書かれています。

この言葉が世の中に出回るようになった時期は「、勝ち組・負け組」と言う言葉が出回り始めた時期と大体同じではないとかと思っています。いろんな問題を個人の能力や責任に還元していくような考え方が浸透していくと、あらゆる人間的な営みが競争に勝ち抜くための「なんとか力」に転化していくということです。

今日、テーマとして使われている「市民力」と言うのはそれらとは異質だとは思いますが、ただ「人間力」と言うといかにも良さそうな言葉ですが、その使い方によってはこれまで「力」などと言わなく

てもよかったものまでも、競争に勝ち抜くための能力の一つとしてしまうという面があると思います。

僕はフーテンの寅さんなどはだらしなさも弱さも一杯ある「人間味」のある人で大好きですが、「人間性」「人間らしさ」人間臭さ」と言っていたものを「人間力」と言った瞬間に、どこかの企業の「人間力」養成講座に寅さんが来ていろんなスキルを教えてくれる、と言うようなイメージがします。それは寂しいような違和感のようなものを感じます。このあたりで、会場の皆さんはつながった方と、切れてしまった方といると思いますが（笑い）。

◆「場」の重要性

私自身は造り酒屋に生まれ、出稼ぎの杜氏さんたちに囲まれて育ちました。「夏子の酒」という漫画をご存知の方はいらっしゃいますか。造り酒屋の風景が描かれていますが、あんな上品な世界ではないですね。ものすごく猥雑な空間でした。杜氏さんたちというのは、もちろん酒作りは一生懸命にやるんですが、夜中には花札をしたり、酒は飲み放題ですし、だらしないというか、子ども心に尊敬できる人はいないと感じていました。

けれども、みんな子供を家に残して出稼ぎに来ていますから、僕は可愛がられました。猥雑だけれどとても面倒見がいい、そういう人たちに囲まれていた空間が懐かしく感じられます。

教育の問題というのは、「なんとか力」の構造とか、人づくりとか人材形成と言われはしますが、私自身は「人づくり」という言葉も好みません。むしろ教育は先ずは「場づくり」と考えるべきだと思います。子供、若者、市民が学んだり育ったりする「場」をつくることです。人材とか人づくりと言った瞬間に、どこかおこがましさや、まるでモノを作るような発想が入り込む。モノというのは望む通りの形にすることができますが、人に対してもそのような発想が入り込むように思います。

◆「評価」の一律性

私は１９６０年生まれですが、その頃の風景から比べると教育の状況はとてもきつくなってきています。大人たちが子供に向ける眼差しも学校の先生のようになってきています。家庭のお父さん、お母さん、また、市民の向ける眼差しが大変評価的なものになってきています。

例えば今ベストセラーになりつつありますが「佐賀のがばいばあちゃん」という本をお読みになった方はいらっしゃいますか。著者は漫才コンビＢ＆Ｂの島田洋七。広島の生まれでお父さんが被爆により亡くなり、母親と２人暮らしをしていましたが、生活が苦しく佐賀のおばあちゃんに引き取られ、そこでの暮らしを描いたものです。

私はあちこちでお話する度にこの本を推薦しているんですが、とてもおおらかと言うか豪放なおばあちゃんがそこに出てきます。ただ大変貧乏で、家の前に流れている川に竹竿を渡して、上流から流れてくるものを引っかけては食べたというくらいです。少年洋七が「お腹がすいた」というと「それは気のせいだ」と言う。成績表を初めて持ち帰った時、体育だけ「５」で、あとは「１」や「２」が並んでいる。それをおばあちゃんにすまなそうに渡すと、「大丈夫、全部足せば５になる」と言ってくれる（笑い）。

ところが今では、下手をすればこのおばあちゃんは教育に対して真面目でないと思われてしまうでしょう。しかし母親の元を離れて不安でいた少年洋七に対して「お前はお前のままでいいよ」ということを全身で表現している。そういう眼差しがここにはあります。

現代は子供の周りから、大人たちの眼差しから、そういう大らかさがどんどん失われているという状況にあるように思います。学びと仕事の意味を地域や学校とともに問い直し合う場づくりが大事なのではないかと言うことです。競争と統制のシステムが至るところに張り巡らされている状況の中で、自分たちの暮らしの場から共生と参加につながる学びや仕事のあり方を編み直していくということを、今日はお話したいと思います。

Ｂ　スキル主義

◆教育の現場で

この５年間ほどの間に、学校の中での「力」と言うもののとらえ方がどんどん変質してきていると思います。

その例をお話します。ある中学校で「インタビュー力」をつけようという授業がありました。コミュニケーションの力をつけるために設けられた単元です。いろんな人にインタビューするということは「仕事観」を養う上でも大事です。

しかし中学生に「インタビュー力」をつけるとなると、インタビューのスキルを手ほどきするということがまず第一に行なわれることになります。つまり、聞くべきことを前もって整理しておく、メモや記録を取る、または限られた時間を有効に使うために適切に話題を転換することなど、あらかじめ勉強しているんです。

その彼等が戦争体験を聞こうという場面に参加したことがあります。６，７人のお年寄りが来てくださり、４，５人ずつに分かれたグループでインタビューをしていくわけです。

「召集令状が届いた時はどんなお気持ちだったんですか」というような質問に対して「みんな万歳、万歳と言ったし、自分も言ったけれど、それだけじゃなかったんだよ」と語りだす。滅多にない機会に大事なことを話そうとする、その方の熱意というか勢いというものに子供たちも触れて、体が自然にその方に正対していく。斜に構えているんではなくて、まっすぐに向かい合う。受け止めようにも受け止めきれない話を聞こうとする、そういう姿勢だと思います。

それはごく自然なことなんですが、メモを取らなくてはならないという頭があり、メモを取るのには時に身体の向きを変えなくてはならない。それが非常にもどかしく感じている様子が窺えました。

また５０分の授業のうちの３０分くらいでインタビューしているわけですが、その３０分の間に話題を適切に転換するということは非常に難しいことです。子供たちは「そのお話はよく分かりました」という言葉で転換しようとする。けれども「召集令状の話はよく分かりました。では次に」とは行けない雰囲気があるわけです。

◆スキル習得優先がもたらすもの

その３０分が終わったあと、全体で成果を共有する場面になりました。そこでの子どもたちの感想を聞いて虚を突かれる思いでした。

「いろんな方のお話を聞いてみてどうだった？」という問いかけに対して、想定できる答えは印象に残った言葉とか、聞いて驚いたことなどです。ところが１人を除く全員が「今日はインタビューが上手くできた」とか「できなかった」という感想だったんです。その状況が目に浮かびますでしょうか。

インタビュー力をつける授業であり、スキルを学びそれを実際に試してみたわけです。その結果うまくできなかったという感想を持ったということです。

戦争体験の聞き取りをするというのは日本の学校教育の伝統です。綿々と続いてきて、どこの学校でもそういう風景があった。しかしその感想を語り合う場面で、自分のインタビューの仕方の出来不出来だけを語り合うなどということはこれまではなかったことでしょう。

この授業の最後に、来てくださったお年寄りに感想をお聞きしました。最後に話された方は十数年前に教職を退いた方でしたが、開口一番が「今日はみなさん、すみませんでした」という謝罪の言葉でした。「きょうはインタビューの仕方の授業だったんですね。私たちは伝えたいことが一杯あって、ついつい勢い込んで話してしまいました」とおっしゃいました。謝罪と反省の形は取っていますが、このような授業への批判や問い返しの言葉として受け止めるべきではないかと私は思いました。

担任や生徒を批判するわけではなく、いい教室でしたし、取り組みもとても面白かったんですが、日

本の至る所でこのような発想での授業が行なわれているのです。

◆スキル主義からリテラシーへ

どうしてこのようなことになってしまうのか。さまざまな「力」を手っ取り早くつけるということのためにスキルのプログラムのようなものが生まれ、それを子供に施していくと、あたかもその「力」が身についたように見えます。しかしその時、本当に大事にしなくてはいけないはずのコミュニケーションはどうなったのかと考えざるをえません。

コミュニケーションとは、差し出される相手の手と自分の受け止める手との関係であるはずですが、いつのまにかコミュニケーションを育てる教育をしようとして、コミュニケーションの場面が失われるという結果になってきていると思います。

そういう視点から言うと、「学ぶ」「力をつける」ということが個体還元的になっていき、一人ひとりの能力の問題とされてしまっています。しかし実際には、他者と関わり合うなかで形成されていくものです。

子供たちや若者が変わったのは、その生活空間が変わったからです。現状は池の鯉が水を奪われてきている状態です。水が少なくなれば鯉は泳げませんが、それを見て「泳力」をつけさせようと、ヒレの動かし方を教えているようなものです。その一方で、池の水はどんどんなくなっているわけです。

確かにスキルは大事ですが、学んでいくことがそのままスキルのトレーニングと捉えると、非常に狭いものになってしまいます。知識や技能は大事ですが、学びの活動や暮らしの中にどう位置付けていくかという点が大切です。それを「リテラシー」としました。

「リテラシー」とは一言で表すと「知識や技能を実際に活かせる」ということです。例えばテストで何点取るかではなく、学んだことを世の中で捉え直したり、自分が人と関わっていくことに活かせるかということです。

「あいうえお」を学ぶのに、ただ文字の形を反復練習するのであれば、それはどちらかと言えば「スキル主義」です。けれども「あ」のつくものは何がある？と尋ねて、「あ」という言葉と文字を重ねていくというやり方であれば「リテラシー」になると言えます。

C　数量評価

今はなんでも数量評価する。または数量評価できるものだけが強調されているという面があります。

例えば子供の意欲を数量評価することは難しい。教師はその説明責任も果たさなくてはならないということから、教師の中には生徒の発言回数を数えている人もいます。

でも、それで生徒の意欲を測るとしたらずいぶん滑稽なことです。そうではなくて、もっと質的なものとして「力」を捉えていく必要があると思います。

D　達成目標

また、達成目標というものが出されますが、どれだけ到達したかではなくて、どういう変容プロセスがあるかということこそ注目するべきではないでしょうか。

さきほどのインタビューの例とは違う、もう一つの教室の風景をご紹介します。

◆授業にはない学び

5 年生の福祉の授業で「みんなの幸せ」というテーマで、地域のいろんな方と福祉について考えるということになりました。Ａさんは以前から身体の不自由なお年寄りが、時おり笑顔を見せることに対して「どうして、そんな笑顔ができるのか」と不思議に感じていたということです。

それである福祉施設の紹介でＭさんという目の不自由なお年寄と文通をすることになりました。Ａさ

んが出した手紙に対して点字の返事が来るので、Ａさんも点字の勉強をして手紙のやり取りをするようになっていきました。

私が立ち会ったのは、6 年生になったＡさんがMさんからの手紙をクラスのみんなの前で読み上げるという場面でした。5 年生から持ち上がりの先生が言うにはＡさんは教室で発言することはほとんどない、おとなしい生徒でした。その彼女が公開研究会として参加者が１００人ほどいる中で、自分一人で読み上げていくんです。手紙の中身は、Ｍさんはどういう時に幸せって感じるんですかというＡさんの問いかけに対するお返事でした。

中身は『私は花を育てているんですよ。花が育っていくことを感じる時に幸せだと思うんです。いろんなボランティアの方たちのお世話になっていることをとても感謝しているんですよ。人に感謝できる人間が自分に幸せを呼び込むんだと思いますよ」と連綿と綴ってあり、最後に「Ａさん、点字で手紙を書いたり読んだりするのは大変だったでしょう」という言葉も添えられていました。

それを読む時のＡさんの声は少し震え声でしたが、それまでＭさんとどんな付き合い方をしてきて、Ｍさんに何を感じているのかが現われているような声でした。

読み終わった瞬間に、会場にはどよめきのような沈黙が走ったように感じました。Ａさんのその姿に、学びの力というのはすでに現われているわけです。その後クラスの生徒が質問をしていきます。「Ａさん、点字の勉強は大変じゃなかった？」と聞くと、「大変じゃなかった。私はＭさんの手紙を点字で読むのも、点字でお返事を書くのも嬉しかった」という答えでした。実際には一通の手紙を書くのに１週間くらいかかるんですが。

また別の生徒Ｂさんは、耳の不自由なお年寄りと関わっていたんですが、自分はもともと手話の勉強をしていて楽しかったというんです。だけどＡさんの話を聞いていて感じたけれど、手話を習っている時も楽しかったけれど、手話を使っていろいろ話し合える今の方が、もっと楽しいということに気が付いたというんです。

◆変容の場へ

つまり、手話とか点字というものもスキルであり、コミュニケーションの知識や技能です。それを勉強することがＡさんは「嬉しかった」と答え、Ｂさんは手話を使っている今のほうが「ずっと楽しい」と答えた。「力」のあり方が具体的な場面として現われていますし、ＡさんやＢさんの固有の変容の物語があります。

そして、もう一つ大事なことは「力」というものは自分にとって意味があるだけではなくて、人にとっても意味があるということです。そのことが競争と統制のシステムの中にいると忘れられてしまいます。今身に付けている「力」というのは、自分にとってだけでなく周囲の人にとっても意味があるということです。

Ａさんの学びの力は周りの子供たちにも問い返しています。他の子供たちは「お年寄りがかわいそうだから何か楽しませよう」という企画を考えていたんですが、Ａさんは、Ｍさんという一人の成熟した女性の幸福観というものに触れて、その奥行きを垣間見ているような学びをしています。

そういう学び方をしているＡさんに触れた子供たちは、自分たちがしていることを「これでいいのかな」と問い直す。またＢさんは自分が感じたことの意味ってこういうことなのか、と気付く。そういうように周囲の人や教室全体にインパクトを与えていく。それが共生と参加ということにつながっていくのです。

ところが現在の状況は、その個人がどれだけ能力を持っているかであり、それをどう数量化して評価するかということのみが重視されています。

Ｅ　学力低下問題とは

◆ＯＥＣＤ調査から

「学力低下」問題というものも、視点の一つとしてお話したいことは、教育の問題であると考える以前に貧困の問題してとらえることが必要だということです。

私が住んでいる足立区は都内２３区の中で、学力テストが２年連続最下位だったという区で、ベネッセからの校長が着任するなどいろいろな対策が講じられています。しかし、一つの教室の中にテストを白紙で出す子供が４，５人いれば、その学校の平均点は１０点以上低くなります。そもそも授業に参加できていない子供が何人いるかによって、平均点は大きく変わってきます。

日本では国際的に地域間の格差が学力と相関している国ということが統計から現われています。ＯＥＣＤが去年発表した学習到達度調査 PISA（ Program for International Student Assessment）で、日本は各科目ともずいぶん順位が下がって「ピサショック」などと言われました。

◆社会的条件との相関

その調査の中で興味深いことは、家庭の経済水準や文化水準と子供の学力とをグラフの縦軸・横軸として表すと世界のどこの国でも相関関係にあるということと、その相関の度合いが国によって違うということです。

日本は学校ごとに見た子どもたちの家庭環境水準と平均学力との相関が、ＯＥＣＤ参加国のなかで一番高い。それが意味していることは、学力テストは教育の成果を表すというよりは、それ以前にその地域の経済的・社会的水準を強く反映するものだということです。

足立区には、ある意味では「スラム」的な地域があり、学校によっては要保護者・準要保護者として修学旅行費用や給食費用の負担軽減の対象となる家庭が８割くらいを占めるような学校もあります。そういう学校は学力平均点が低いのです。

ところが現在の社会や文科省には、学力テストを競争的な意識を高めるために用いる風潮があります。学力が下がっていることから文科大臣は競争意識を持つことが大事だとして、全国一斉学力テストを導入するということになり、父母も概ねそれを肯定しています。それによってクラスの点数が高ければ「いい教師」と評価され、学校の平均点が高ければ「いい学校」という評価が地域からなされることになるでしょう。

けれども家庭や地域の実態が学力に反映しているという事実に立てば、その方向は倒錯した事態を生み出すことになります。学力が極端に低い地域の学校にこそ、もう少しお金や人をつぎ込み、福祉の面での充実などを図ることが必要です。競争に勝ったら何かいいものを与えると言う発想ではなく、足りない地域の学校にこそ手当てが必要ということです。しかし現在の考え方は「学力」もその学校や個人の「力」とみなされているため、教育の本質というものを見誤ることになっています。

２．仕事の教育の分水嶺

Ａ　「キャリア教育」推進の背景

あえて「仕事の教育」としたのは、「キャリア教育」という言葉が狭い意味合いに限定して使われている感触があるためです。結論から言うと、「学びの分水嶺」で掲げた問題点があると感じています。現在「キャリア教育」が叫ばれている背景にはいくつかの要因がありますが、大きく分けると次のようになります。

①リアリティの希薄さ

日常的に学生たちと触れていますが、学生たちの中に職業観・仕事観といったものがないことに驚きます。それらがないのに就職はしなくてはいけない。彼等がやることは、先ずは適正検査などをして自

分が何に向いているか調べることです。大学で一番必要とされている「力」は「就職力」と言うことになるのでしょうか。

そのために学生たちは相互になんの脈絡もない資格をいくつも取得することに懸命です。中には在学中に１２個くらい取った者もいます。しかし、いろんな職種があり自分の好みはあるけれども、実際に職場でどんな仕事をしているのかとか、その人がどんな生き方をしているのか、というリアリティは極端に薄い。それがないまま就職を考えているという状況があります。

毎年学生に「社会人」という言葉から連想することを挙げてもらいますが大変貧困です。「通勤」「ネクタイ」「セクハラ」などほとんどサラリーマンのイメージであり、誇らしさや市民に関わる言葉というのはまず出てきません。

働いている人の姿が目に見えなくなってきたということが大きい。そういう状況の中で、実際に働いている人たちの姿にもっと接していくべきだということです。

②仕事のあり方が多様化

第一次・第二次・第三次産業の割合は、１９６０年を境にして、増減のカーブがクロスしていきます。今では第一次産業の人口は５％程度で、第二次産業が３０％弱、第三次産業は６５％程度となっていますから、産業構造が変わってきていることは確かです。その一方では、ＮＧＯやＮＰＯの広がりという現象もあります。

今、学校教育でコミュニケーション能力を育てるということに熱心に取り組んでいますが、第三次産業で最も必要とされる能力がコミュニケーション能力であり情報処理能力です。つまり産業構造の転換と、学校教育とが連動しているということがあります。

③仕事に就けない、就かないニート・フリーターの問題

「キャリア教育」推進に際して厚労省が提示する資料は、第一にニート・フリーターの増加のことです。その時のニート・フリーターの取り上げ方ですが、若者バッシングという意味合いで使われていることが多いように思います。知らず知らずのうちに「近頃の若者は」というような意味合いで使っていることが多い。つまり勤労意欲がなく、なんの努力もしていない若者がいるので、「勤労意欲を涵養」し、「職業能力を開発」するということです。

④仕事の環境の問題

「キャリア教育」を推進しようという人たちは、仕事の環境がどんな問題をはらんでいるかを指摘することはあまりないように思います。環境の問題とは、一つにはパート労働の増加です。２０年前に比べると２倍近くになっていて、全労働者数の４分の１くらいを占めます。しかも正社員とほぼ同一の仕事をしていながら賃金に大きな格差がある。ヨーロッパにあるような「同一価値労働・同一賃金」という発想は全くない。安い労働力を維持するシステムが日本の企業の中ではまかり通っている。またリストラや過労死の問題もあります。しかし、そうした実態を含めての仕事の教育をしていないのが現状です。

また、「貧困率」というのも大変な勢いで上昇しています。今年２月、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）が加盟国の貧困状況について比較調査した報告書に「貧困率」というデータがあります。貧困率とは、可処分所得の中央値（上位から並べたときに中央になる値）の５０％以下の所得しかない人の割合が国民全体の何％になるかを示すものです。

日本では年収４百何十万円というのが最も多い層だそうですが、その半分つまり年間２２０万程度しか収入がないという人たちの割合がＯＥＣＤ２７ヶ国の中で第５位（１５．３％）でした。ちなみに１位から順にメキシコ・アメリカ・トルコ・アイルランドですが、アメリカの１７．１％とは２％しか違わないのです。

「貧困率」の統計には各種の社会保障のお金も収入に含めて計算しています。社会保障の分を除いて純粋に市場から稼いで来た金だけで計算すると、ヨーロッパ諸国のほうが貧困率は高くなります。つまり日本では社会保障の厚みがそれだけ貧弱だということです。

それほど貧困が深刻に進んでいる。そのことが当然ながらパート労働やリストラなどの問題とつながっているわけです。

また、仕事の教育という中には税金の教育も含まれます。税制の仕組みです。累進課税が消費税導入から以降は１８００万円以上には課せられていないということなども、仕事への理解として必要だと思います。

Ｂ　キャリア教育の現状

小学校で行なわれている関連教育の場としては、小学校１，２年生では生活科というのがあります。社会的な体験活動をしています。３，４年生では総合学習として、いろんなテーマについて考えることになっています。

中学校でも総合学習の場はありますが、それ以外に進路指導と職場体験の時間が全国的に持たれています。現在は短くて１，２日間、長い場合では２週間くらい。いわゆる「インターン」のように一定の職場に入って体験するという活動をしています。

もともとは神戸の震災の後に、子供たちの心の荒廃を食い止めるために地域との関わりを持っていくことが必要だとの考えから生まれたものです。それを文科省が全国的に広げていこうとしている。中身はそれぞれです。職場体験自体は否定するものではないと考えますが、２，３日の体験で仕事観が生まれたり職業への理解が深まるということではないだろうと感じます。

Ｃ　「仕事観」

◆新たな「倫理」構築へ

仕事の教育というものを考える時に大変重要だと思うのが「仕事観」です。

学生や子供たちは、仕事をしてお金を稼がなくてはならないということは理解している。いろんな職種があり、自分がそれに向いているかどうかを考えなくてはならないということも理解している。しかし、職種の問題ではなく、仕事をするということは人生の中でどういう意味を持つのか、仕事をしていく中での葛藤ということについては非常に希薄です。

村上龍の「１３歳のハローワーク」という本が売れています。興味のある分野ごとに職種の紹介があって、確かに面白いんですが、例えば教師という職種について一般的に説明するだけではなくて、どういう意識で教師として働いているのか、どんなところに働きがいとか難しさを感じているのか、そこに個々の「仕事観」というものが出てくるのだと思うのですが、そこにはあくまでも「職種情報」しかないんです。

自分の生活の中でまだ多くの人と触れ合ってなく、ある意味ではとても限られた対話空間、非常に抽象的な空間の中にいる子供が、自分の個性とは何かを考えて、それに見合った職種をチェックする。そのようなことを越えていくことが必要だと思います。

そのためには「仕事観」あるいは「仕事の倫理」とも言うべきものが大事です。その人にとって「いい仕事」というのはどういうものか。「倫理」も過渡期にあると捉えていくことが重要です。

これまで仕事の「倫理」として重要な位置を占めていたのは「勤勉」であり、農業でも会社勤めでも共通の価値観としてかつては存在していました。しかし会社のために一生懸命に働いても、それが自分の人生のためになるかどうかとは別のことだということが、いろんな場面で察知される状況にあります。

大人はもちろん、敏感な子供たちも「勤勉」という「倫理」で仕事に就こうとは考えなくなってきていると思います。

ある意味では封建的な「ご恩と奉公」のような、忠誠と見返りという相関関係が見えなくなりつつあり、その中で「勤勉」という「倫理」を涵養しようとすることは無理があると思います。

◆応答責任

では「倫理」は不要なのか。少なくとも若者の中には仕事を通じて「自己実現」をしていきたいという欲求があります。「自己実現」を「いい仕事」の価値基準としていくことは大事ではあります。けれどもそれは場合によっては利己主義と区別がつかなくなってくる恐れもある。例えばある人にとっては株で莫大な儲けを手に入れることは「自己実現」であるかもしれませんが、それは仕事の「倫理」と言えるのか。そう考えると、「自己実現」が尊重されるというだけでは、新たな仕事の価値観として認めることはできない。

私は一つの提案として「応答責任」、レスポンスビリィティを大事にしたいと考えています。もともとｒｅｓｐｏｎｓｅする ability、つまり呼びかけに応えるということです。何かが必要だとか、何かをして欲しいという他者の呼びかけに応えること。それは「応答責任」または「応答可能性」とも訳されています。私は「働き甲斐」ということを考えるとレスポンシブルな仕事ということが重要な解釈として浮かび上がってくると考えています。

ある飴細工の職人さんの話ですが、一つ３００円ほどなので子供にとっては大金です。だからそれに応えるだけの飴を作らなくてはならないと思っているとのことです。それを聞いた学生はいい仕事観だと感じるものがあるようです。

◆公共圏

実は「応答責任」を果たしたいという葛藤は個々人にあります。それを大事にしていくことが公共的にどういう意味を持つのかと言うことを考えることが仕事の価値観にとって大事です。自分ひとりではなく皆んなにとってどういう意味を持つのかという意味で「公共圏」という言葉を出しました。その公共圏を意識するということは、現在仕事として置かれている環境を皆んなで問い直すということにつながります。

そういう意味からも、いろんな方の仕事観をお聞きするような対話空間が、小学校の時から必要だと思います。小中高だけでなく大学生も含めて職種の技能に関する情報だけではなく、顔と名前のある一人ひとりの仕事観に触れていくような「場」をどう形成していけるかということが一つの重要なポイントになると思います。

大学では去年から半期の授業でそれを始めました。「この人いいな」とか「この人かっこいいな」と思うような方を選んで、数人でインタビューをしてくる。仕事に就いたいきさつ、仕事の難しさや面白さなどをお聞きしてまとめ、報告をします。

同様のことを「キャリアテ」というＮＧＯがやっています。大学生を募ってマタギのおじいさん、訪問歯科医など多様な職種の人たちのところへ出かけていってインタビューをする。その結果を仲間内で語り合うだけではなくて、ホームページに掲載しています。また都内の廃校になった教室を使って、公開でお話をお聞きするという活動もしています。

中学でも、そこを卒業した先輩が語りに来てくれると、普段は授業なんかに見向きもしない生徒が飛びついてくる。職場体験もいいんですが、働いている方たちは忙しいので、ただ手伝いに行ったというだけになりがちです。それでは子供たちに現実にどんな葛藤がありどんな楽しさがあるのかということは見えてきません。

ですからインターンとともに実際に対面してお話をお聞きするという活動が組み合わされて行くとい

いと思います。

◆大学での聞き取り

先ずインタビューに行ってきた学生が何を感じたかを話し、それを聞いた後に語り合います。そういう機会がもっとふんだんにあるといいなと思っています。学生たちとしたインタビューの中からお二人のお話をそのままご紹介します。

(1）写真家の百合子さん

小学校三年生の遠足の時に親のカメラを持っていって、大きな杉の木の根っこを撮ったの。すごいなぁという感じで。それを親に見せたら本当にすごいねって驚いて、その時に伝わったと思ったの。写真がどんどん好きになって、高校で写真部になった頃には、もう写真なしでは考えられなかった。大学の写真部の人たちと交流したり、プロの写真家の展覧会を手伝ったり、大学も写真学科に進んだ。その頃は写真はあくまでも表現で、職業とは結び付けていなかったけれど、仕事をするなら写真に関係あることをしたくて、最初はファッション雑誌のスタジオに入った。プロとしての技術を学びたくて。

でも、どこか方向が違うなと感じていた。商品と向き合うのではなくて人間と向き合う写真が撮りたい。それで不安だったけれどフリーターになった。「こんな写真を撮っている」と雑誌の編集部に売り込みに行って、一つでも仕事が来たら、依頼された以上の仕事をする。どんな小さな顔写真一枚でも、もう少し時間をくださいと無理を言って、それだけで作品になるような写真を撮る。そういう写真を認めてくれる編集者がいれば、また仕事が来るから。

その頃ちょうどベルリンの壁が崩壊して、変わっていくヨーロッパを撮りたいと、ルーマニアのある村に住み込んだ。旅人としてではなく、生活者として写真を撮りたいと思って。

近づきたい、見つめたい、好かれたい，知りたい、分かりたい。自分がそこで一生懸命求め続けていたもの、シャッターを切り続けていたものを、一冊の写真集にした。それが最初の「命に当たる光、命を育む社会」という作品。

写真のいいところは、生身の自分が触れた現実を伝えられるところ。シャッターを切る時、そこにいられたことを感謝することがある。私はあなたと、あなただけではない大きなものに立ち合っている感じがして恐いくらいドキドキしながら、１００％ここにいたいと思える時。写真を現像する時は、その場面にもう一度出会い直し、見つめ直している感じ。あの時、自分は何にシャッターを切っていたんだろうって。

写真が難しいのは、相手の世界に踏み込まなくてはならないところ。ある造り酒屋の取材をしている時に「迷惑だからもう来るな」と言われて、どうしたらいいか悩んでいる時に、その会社の別の人から「俺たちは酒を作るプロだけど、あんたは写真を撮るプロなんでしょう」と言われた。お互い真剣勝負なんだと、もう一度撮り直した。

写真の仕事を休んでいたこともある。結婚して出産して、子育てが忙しかった頃。夫婦喧嘩をしたりすると自分はなんでこんな目に遭うんだろうって思っていた。ある日、ひどい喧嘩をしたために倒れたテーブルを見ていたら、そこに窓から光が差し込んでいた。それを見ていたら思わずカメラを手にしてシャッターを切っていた。

その時、何もかもが否定されているような状況の中で、自分がどこか肯定された気がした。写真があれば大丈夫と。街角での勧誘なんかで「信じているものはありますか」と聞かれることがあるけれど、私は自分にとってのそれは写真かなと思った。

（2）教師の真由美さん。

いろんな仕事をしてきて今年初めて教師になった。大学時代は演劇をしていて、卒業後も別の劇団に関わりながらフリーターでバイトをしていた。喫茶店、漫画喫茶、ゲームセンター、カラオケなど。言いたいことを言うせいかあまり長続きしなくて、店長に濡れ衣を着せられたバイト仲間をかばって首になったり、客が少なくてため息ばかりついている店長に「あんたみたいに覇気のない人とは一緒にやってられません」と言って辞めちゃったり。辞めてもなんとかなると思っていたこともあるけれど。

でも二度目に劇団を辞めた時にバイトも全部やめました。みんなには「限界を感じた」と言ってますが、頑張ればなんとかなると思っていたけれどいい役がもらえなくて、初めて頑張ってもだめなことがあるんだなと知って。いわゆる「挫折」。

その時、なにもかも全部辞めて何もしなくて、一人暮らしで残金３万円なのに、ただ電車に乗ってプラプラしていたり、部屋に引きこもっていたり。その頃「死にたい」と思ったりすることもありました。

でもそれから軽井沢のホテルの住み込みでのバイトに行きました。とてもきつい仕事で、カレンダーに「あと何日の辛抱」と書いていました。でもそんなことを書いている頃には元気になっていて、少しばかりのお金も貯まりました。

戻ってからは、契約社員の仕事を６年ぐらいしました。顧客の情報を整理する仕事で、それまで自分には向かないと思っていたパソコンを身に付けたことはありがたかった。仕事って頑張って続けていれば、どんどんできるようになりますよね。それが面白い。でも、契約社員なので、大事なことは任せてもらえない。それが歯がゆいし悔しくて正規の就職がしたいと思った。

それで教員採用試験を受けることにしました。もともと小学生の頃から教員にはなりたかった。でも高校生の頃に、大学を出てそのまま教師になんてなれない、いったん社会に出てから、と思うようになって。

劇団は社会という感じではなかったけれど、大学時代に惹かれていてやれるだけやろうと思って。でも、いろんなことをしながらも、いつも気持ちのどこかには教員というのがあったんです。

まだ始めたばかりだし、難しいことばかりだけれど、不思議とこの仕事をしていて「もうだめだ」と思ったことは一回もないんですよ。今までの劇団やフリーターや引きこもりや契約社員の経験が全部つながってくるし、そこで自分がつかんだものを子供たちに還せる気がする。そんな仕事ってあんまりないですよね。

それに自分がおかしいなと思うことがあったら、周りの教員に相談することもできるし、時には議論もしてくれる。バイトや契約社員の時には、言う資格がないと思ったり、言っても取り上げてもらえなかったのに、責任の重い役割だけれどそれを引き受けて任されるって、すごくやり甲斐があることだと思うんです。

このような記録を学生が作ってきます。

真由美さんは実はうちのゼミ出身です。考えてみると、教育学部にいながら、こういう言葉を聞く機会はないんですね。教師になるための勉強を一杯しているのに、実際に教師になった人がどういう思いでなったか、今はどんな風にしているか、ということはなかなか聞けない。

D　分水嶺を見渡す

結論から言うと、問題をなんでも個人の能力と責任に還元してしまうような、個人還元的な状況の中

に教育も嵌っているわけですが、その教育のシステムの中に「キャリア教育」を入れていくと、またぞろ「個人の能力開発」というところに集約される。そうではなく、もう少し大きな枠組みの中に「仕事の教育」というものを位置付けていく必要があるということです。

適性検査があって職種情報の摂取があって、その職業スキルを身に付けていくという流れは一方では必要ではありますが、それだけではない。適性検査というのは非常に疑問に感じています。学生が本を買って一人でチェックしていって自分の適性を知るというのは奇異な感じがします。いろんな人と出会って「こんな人になりたい」とか「こういう仕事をしていきたい」と考える、つまり他者との対話空間の中で自分を問い直していくという学びではない。

適性検査というのは、もともとアメリカの軍隊で生まれたものです。軍隊で、リクルートした新兵たちをどこに配置したら最適かということを決定するための検査として発達したもので、後にいろんなところで応用されてきているわけです。もともと自分が何がしたいかを決めるものというよりは、使う側がどう使えば効率的かという発想からできたものであるという点は気になります。

「何になりたいのか考えなさい」と言われても考える基盤がない。仕事の教育が「意欲の涵養」と「職業能力開発」だけに還元される傾向がある。または「企業のニーズ」という発想はあっても、働き方を暮らしの側から問い直していくという面はない。そのような狭い回路で適性を判断したり選択をするということは難しいのではないでしょうか。

それに対して非常にレスポンシブルなまたはパプリックな「応答的公共性」を備えた仕事の教育というものが必要なのではないかと考えています。それは他者の仕事観に触れる場をどう創出できるかということに尽きます。きょうのテーマにある「地域と学校が一体となって」ということの意味はここにあると思います。

愛知のある地域では高校の校舎を土曜日に開放して、地域のいろいろな仕事を持っている方をお招きしてお話を聞くということをしています。中には地元から進学などで出て行ったけれどまた地元で働いている人もいるので、地域の仕事観を育んでいくということが循環している。それが理想ではないかと思います。

仕事をめぐる問題や仕組みを考えるために、例えば同一労働でも賃金格差が極端にあるというシステムについてディベートを中学でするということはできると思います。その時に諸外国でのデータを出しながら考えていくということも、仕事の教育という中に入れていくといいと思います。

他者との関わりの中で仕事観を形成できるような場を、学校と地域が一緒になって作っていくことに軸足を置いていくならば、「キャリア教育」というものがもう少し膨らみを持ったものになるのではないかと考えています。以上が私の方からの提案です。

《質疑応答》

＜質問＞　教育問題というと「地域との協働」という言葉が良く出てきますが、どういう形で行なわれているのか具体的な例がありましたら教えてください。

＜岩川＞　午後のパネルで具体的になると思います（笑い）。「地域」とは分かりにくい言葉ですが、英語で言うとコミュニティですね。しかし日本では職住分離しているので、厚労省の白書でも「周りに親しい友人はいるか」との質問に対して「いる」と答えていたのが２０年前には５０％でしたが、現在では２０％くらいに減っています。そのようにつながりが薄くなっている状況ではその場所を「地域」とは呼べないと思います。

また先ほどご紹介したような活動は別に地域でなくてもできる。いろんな仕事観をお持ちの方のお話を聞くということだけであれば「地域」という特定の場所に限定しなくてもいいと思

います。

私は「地域」をコミュニティと訳すならば、身近なコミュニティと、もう少し離れた所でつくり出されるコミュニティとの両方があるということを前提にして考えていく必要があると思います。

小学校では、「地域」は「学区」と重なるので鮮明です。その中にいる大人の話を聞くということが小学校では行なわれています。それが中学、高校と行くに従って学区自体が広がっていくので、「地域」の範囲も広がっていきます。

「地域」の関係自体を編み直していくことを一方では考えていかないと、地域の教育力というものを頼めないという現実があります。逆に言うと、このような企画を通していろんな職場の方たちがつながっていくということもありますし、地域のＮＧＯやＮＰＯの役割も大きい。学校教育と社会教育をつないでいく、第三の機関として午後のお話に出てくるのではないかと思います。

一度流れ出てしまった池の水は戻すことはできない、つまり、かつてのような共同体を回復することはできない。しかし新たな水（環境）をなんらかの仕方で再び入れることはできると思っています。

＜質問＞　本庄市で１０年近くフリースクールをやっています。中学や高校を中退したりした子供たちの中には大検を受けたいという希望が多く、開設当時は生活支援だったのが現在では学習支援が主体になってきています。その子供たちの人格形成という点で指導に不安も抱えおり、アドバイスをいただきたい。

＜岩川＞　どちらかと言えばコミュニケーションが苦手という子どもが多いと思います。するとフリースクールのスペース自体が決まった人とだけしか顔を合わせないということになる場合もあるでしょう。しかし周囲の人と触れ合うことがないまま、大検に合格するという学力の保証をしていくのではなく、外側の世界と関わることを含めての場づくりが必要だと思います。

実際に不登校の子供たちの施設でも大学生と一緒に芝居を作っていくという活動をしているところもあります。この２年間、埼玉大学でもそのような取り組みをしていますが、そういう場面を見ていると学生たちよりもフリースクールの子供たちの方が豊かな表現をするということもあります。

子供たちがいろんな場面・人と出会える機会を用意することが重要なのではないかと思います。そう考えていくとフリースクールだけではなくて、日本の子供は高校ぐらいから非常に閉ざされた環境の中に入っていきます。学力で輪切りにされて、付き合う子供たちは似たような環境で生きている。そして中学での同窓生とはあまり交流しなくなるという状況があります。

また地域の中にあるいろんなＮＧＯ、ＮＰＯ同士が出かけ合う場面があるといいと思います。例えば活動の発表の場にお互いが参加したり、一緒に開催するなどの形が考えられるのではないでしょうか。

以　上